

犬・猫の熱中症



湘南獣医師会 塩谷 香織

高温多湿に要注意！

動物たちの

熱中症メカニズム

夏が近づき、蒸し暑く汗ばむ日も出てきました。これからの季節は、人も動物も熱中症の注意が必要となります。多湿の環境下で、高温多湿のおよび脱水によって生じる全身性疾患です。犬は人のように汗腺が発達していない為に発汗機能が乏しく、気温や湿度が高い場合はパントイング（ハアハアと呼吸数を増やすこと）による蒸発気化熱で体温を調節しています。熱中症は犬に多いです

が猫でも発生し、犬と同様に緊急治療が必要となります。

熱中症が最も多く発生する時期は6月～9月で、暑熱環境への順化ができていない7月と8月に集中しています。日中気温が25℃を超え、湿度が60%以上になると日は特にリスクが高いとされています。夏の発生が圧倒的に多いですが、トリミング時のドライヤーの熱風が原因で起こることもあります。

熱中症発生のリスク要因…こんな環境や体質は危険です

・高温多湿の環境
・密閉された車内、風通

しの悪い屋外ケージ、冷房のない室内が代表的な高リスク環境

熱放散能の低下

短頭種、長毛種、肥満、呼吸器疾患（気管虚脱、口頭麻痺、喘息など）、心疾患、腎疾患、若齢・老齢

過度の運動

見逃さないで！

体に熱がこもった時のサイン

パントイングで熱を放散できない場合には、体内に熱がこもり、嘔吐、下痢、よだれ、虚脱、運動失調、けいれん、意識消失、発作、循環障害および臓器障害などが発現します。

猫はパントイングなどの分かりやすい変化が見られにくい為、熱中症と気づかれず、受診が遅れることもあります。

もしも熱中症が疑われたら

（冷却処置のポイント）

治療は冷却処置とダメージを受けた臓器の機能回復が必要です。

受診前から行いたい冷却処置

・常温の水で体を濡らす、または濡らしたタオルで全身を覆った後で、扇風機で送風し気化熱を利用し徐々に体を冷却させる
・凍った保冷剤をタオルで包んで太い血管の走っている腋下部や鼠蹊部に挟む
・過剰な冷却は低体温症の危険もあるため注意が必要です
・冷水の暴露、冷水や水へ漬ける、凍った保

冷剤を直接体に当てるのは薦められません

（末梢血管が収縮し、深部体温が低下せず、臓器への障害が促進され逆効果となります）

・熱中症を疑う場合は動物病院へ連絡し、受診前から可能な限り冷却処置を行う事も必要です

・動物病院への移動中も、車内の冷房や窓からの風を利用して冷却処置を継続できます

命を守るための熱中症予防策

熱中症の予防策として、以下のようものがあげられます。

- 1 暑い日中の運動や外出は避け、お散歩は気温の低い明け方または夜遅くにします
- 2 屋外の犬の場合、風通しがよく日陰のある涼しい場所を過ごす環境をつくる
- 3 常にお水をたくさん用意し、いつでも飲

めるようにする。
4 暑さに弱い犬は、涼しい部屋で過ごさせる

まずは「熱中症にさせない事」が大切

熱中症全体の犬の死亡率は14%とされていますが、重傷例の死亡率は50%とも言われています。そしてその多くは24時間以内に死亡します。適切な治療を行っても延命できない場合があるため、まずは熱中症にさせない事が大切です。

猫の熱中症の予後は明らかとなっていないませんが、犬と同様に注意が必要と考えます。熱中症になりやすい状況、注意が必要な動物、対策を知り、熱中症が疑われる症状が見られたら速やかに適切な対応をする事が大切です。
(かまくら犬と猫の病院)